

「行事の統合」も選択肢

人口減少や東京一極集中により、地方の行事や祭礼の存続が困難になる事例が相次いでいる。これまでの「当たり前」が通用しない時代に、伝統を次世代につなぐ、地域の活力を維持する方法はあるのか。出身地の青森市浅虫地区で、中止となった花火大会の復活に関わった八戸学院大地域経営学科准教授の井上丹さん（42）に聞いた。

温泉街である浅虫の花火大会は毎年8月に行われ、昨年で74回を数える歴史ある行事として知られる。だが、今年6月に従来の実行委員会が財政状況の悪化を理由に中止を決定。井上さんは浅虫の地域づくりに携

北奥羽 未来考

第3部 消えゆく伝統 つなぐ心

⑤

八戸学院大地域経営学科准教授

井上丹さんに聞く



地域から行事やイベントが失われる影響を「経済的損失以上のマイナスになる」と指摘する八戸学院大地域経営学科准教授の井上丹さん＝9月中旬、八戸市

略歴 いのうえ・あかし 1983年、青森市浅虫生まれ。北海道大大学院修了。2008年、リクルート進学カンパニー入社。10年間教育関係の営業職を務め、18年に八戸学院地域連携研究センター准教授。19年に八戸学院大地域経営学部地域経営学科講師となり、24年から現職。

わる任意団体の代表を務め、地域が潤うような時代は平ており、クラウドファンディングを活用して資金を集め、今年15日に大会を復活させた。

行事の継続が困難になるほど地域の力が失われている現状について「過去のまちづくり、地域づくりの結果。建物を増やせば地

「時代に合わせ価値観柔軟に」

スになる」と主張。イベント時だけ来ていた人が来なくなる可能性があり、地域と関わり応援してきた人たちも失望してしまうと危機感を訴えた。

その結果「この地域はもう駄目だ」というイメージを持たれ、さらに衰退する悪循環を招くとして「打ち切りは影響をよく考えた上で決断しなければならぬ」と強調した。

地域の行事や地域そのものが生き残るには「時代に合わせ価値観を柔軟に変化させることが重要」との考え方を示す。自身も地域の年長者から「思い切りやつていいよ」と言われたことが活動の励みになったといい、「昔のままのやり方で他のものを受け入れない雰囲気では、キーパーソンになり得る人も地域外に出て行ってしまう」と世代交

代を促す。

日々、学生と接する中で「今の若者は地域に活力を残したい、という意識が高い」と感じており、花火大会でも学生ボランティアが大きな力になった。学生ら外部の力を借りることも有効だと提案した上で、さらに収入を増やし、コストを抑える経営的視点の必要性（第3部終わり。田村祐

にも言及した。それでも存続が難しい場合について「行事の統合」といった選択肢を提示。「昔のやり方にこだわらず、時代に合わせて合併させたり組み合わせたたりすることは非常に有効な手段」とした。

どんな方法を選ぶとしても、あくまで住民が主体であるべきだと訴え、「次の世代が地域のために働きたいと思った時に受け入れられるのか、先人がつくってきたものを残していけるのか、今が地域の分かれ目ではないか」と語った。